

SHOW HEY シネマールーム

★★★★

海辺の彼女たち (Along the Sea)

2020年/日本=ベトナム映画
配給：E. x. N / 88分

2020 (令和2) 年 11 月 3 日鑑賞 TOHO シネマズ六本木ヒルズ (第33回東京映画祭)

Data

監督・脚本・編集：藤元明緒

プロデューサー：渡邊一孝

撮影監督：岸建太郎

出演：ファン・フォン/トウエ・ア
ン/クイン・ニュー

👁️👁️ みどころ

人口減少、超高齢化社会を迎える日本では、移民の受け入れ態勢をどう構築するかが大テーマ。しかし、留学生は優遇されても、技能実習生の実態に焦点が当たることは少ない。

今や、中国よりも入国者数が多いのがベトナム。勤勉な彼らは成功者も多いが、本作に見る3人の若い女性とは？

彼女らにとって、パスポートや保険証はおカネ以上に大切なはずだが、それを無視してまで職場を脱走したのはなぜ？彼女らが辿り着いた海辺とは？

企画段階では『フォンの選択』と予定されていた邦題が、なぜ変更されたの？それを考えながら、中盤からクライマックスにかけて訪れる“フォンの選択”に、しっかり寄り添いたい。

■□■監督の視線は？前作はミャンマー！本作はベトナム！■□■

藤元明緒監督の視線は、前作の『僕の帰る場所』(17年) (『シネマ41』105頁) はミャンマーだったが、今回はベトナム。また、前作は東京で暮らすミャンマー人の4人家族が主人公だったが、本作はベトナムから技能実習生として日本にやってきた若い3人の女性、①フォン(ファン・フォン) ②アン(トウエ・アン) ③ニュー(クイン・ニュー) が主人公だ。

冒頭、3人の主人公たちが劣悪な労働環境にある、東京と思われる某職場から闇夜に紛れて脱走するシークエンスが描かれる。これを手持ちカメラで撮っているのは撮影監督の岸建太郎だが、①闇夜であること、②カメラの明かりが不足していること、③手持ちカメラだから明らかなにブレていること、という3つの悪条件(?)のため、脱出の状況を正確に把握するのは難しい。しかし、逆にそれが何とも言えない緊張感を生み出しているから、

映画とは面白いものだ。さあ、電車を乗り継いで彼女たちは一路、どこを目指して大脱走を敢行しているの？

■□■舞台は雪の青森。3人を迎えた男は？■□■

私も出資者の一人となった藤元明緒監督の前作『僕の帰る場所』は、2017年の第30回東京国際映画祭で「アジアの未来」部門のグランプリに当たる作品賞と、監督賞に当たる国際交流基金アジアセンター特別賞を受賞するという大きな成功を収めたから、出資金は全額回収できることになった。その出資金をそのまま振り替えて再出資したのが本作だから、私は企画段階から本作の構想を聞いていた。したがって、その主たる舞台が雪の青森になることも知っていた。

しかし、2019年の11月、12月はあまり寒くなかったから、スタッフが青森に出発する前に東京で会食をしたときは雪の心配をしていたが、さて、本作に見る雪の青森は？とある駅で彼女たちを車で待っていたのは、ベトナム人のブローカーの男。彼女たちはこの男の話をそのまま信用して青森までやってきたわけだが、もしこの男が悪い男だったら・・・？

11月3日の第33回東京映画祭での上映終了後、藤元明緒監督、岸建太郎撮影監督と並んで舞台上に登場したのがブローカー役を演じたベトナム人のダーさんだが、彼は本業もブローカーだと自己紹介していたからビックリ。映画の中では「ひょっとして・・・」というきわどいセリフ(?)も登場したが、実は、この男は良い男・・・。

■□■こりゃ重労働！しかし、もっと仕事を！フォンは？■□■

本作の企画段階の仮題は『フォンの選択』だったが、公開時には『海辺の彼女たち』に変更された。そんなタイトルにふさわしく、本作中盤では、青森のとある漁村で朝早くから夜遅くまで魚や海産物そしてその加工に不可欠な氷と格闘しながら過酷な肉体労働に従事する3人の姿が描かれる。今ドキの日本の若い女の子なら、こんな重労働は到底ムリ。一日働いただけで逃げ出してしまうこと間違いなしだが、3人の中からは「ベトナムの両親たちにお金を送るため、もっと仕事をしたいとお願いしよう」との声があったから、ビックリ。

なるほど、これが今どきのベトナムの若者のハングリー精神というものだ。もっとも、3人のうちフォンだけは身体がだるそうで、仕事にも影響が出ていたから、アレ。「どこか身体の調子が悪いの？」そう心配したアンとニューは「病院へ行こう」と促したが、フォンは「大丈夫」と言うばかり。もっとも、技能実習生の立場でベトナムから日本に入国し、東京の職場で働いていたのにそこを脱走して青森で不法就労している3人は、パスポートも持っていないし、健康保険証も持っていない。そんな立場で病院に行っても、診察してもらえないばかりか、警察に連絡されたら入管がやって来て、たちまちベトナムに強制送還されること間違いなし。そんなことは誰よりも3人がわかっていたが、ある日、「何

とかなるさ」と病院に行ってみたが、結果はやっぱり……。

■□■ナニ、妊娠！？そりゃちょっと！ベトナムの性教育は？■□■

企画段階で仮題を『フォンの選択』としたのは、フォンの妊娠が発覚した後のフォンの選択や如何に？というストーリーを描き出すためだった。たしかにそれは面白いテーマだが、もしそうだとすると、本作中盤の①フォンの身体の不調の発生、②不調についての悩みと診察を受けないまま自分で妊娠かも？と気づく展開、③市販の検査薬での妊娠の判明、という一連のストーリー構成には少し無理がある。なぜなら、私は男だからよくわからないが、「ひょっとして……？」ということは、フォンが最初に考えるはずだ。日本にやってくる前に誰とエッチしたのかはフォン自身がはっきり覚えているわけだから、身体の変調を見て、何よりも先に「ひょっとして……」と考えるのが当然。そして今ドキ、そのチェック（検査）は市販の検査薬で一発だから、あんなに悩む前にそのチェックをすればいいだけなのでは……？

もっとも、スクリーン上で身体の不調を我慢しながら働くフォンの姿を見て「ひょっとして妊娠？」と考えた観客は私を含めていなかったかも……。ところで、ベトナムでは、小・中・高校時代の性教育、避妊教育は一体どうなっているの？

■□■フォンの選択は？■□■

河瀬直美監督の最新作『朝が来る』（20年）は、一方では子供に恵まれない夫婦を、他方では望まぬ妊娠をした女子中学生を登場させ、その間にある施設の女性が特別養子縁組で結びつけることによって、ある意味、双方に幸せな人生模様を描こうとしていた。ところが、ある日、ある電話によって、そこに大波乱が起きることに……。

同作では、女子中学生の妊娠発覚が遅かったため墮胎するのが無理だったようだが、本作のフォンの場合は時期的にそれは可能らしい。そして、私は知らなかったが、今ドキは錠剤を呑むだけで簡単に墮ろすことができるらしい。私の大学時代の友人たちは、“父親”の同意を得て、場合によればその付き添いで、少しおなかの膨らんだ女性は産婦人科を訪れていたものが……。しかして、市販の試薬で自分が妊娠していることを確信した“フォンの選択”は？

それが本作本来のテーマだが、どうもフォンは子供を産みたいらしい。そのため、闇ネットで偽造のパスポートや保険証を作ってくれるという情報を得たフォンは、大枚をはたいてそんな行動に走ったからかなりヤバイ。もっとも、性善説に立っている(?)日本の病院はチョロいものだから、それを騙すの簡単なようで、優しい女性医師から、「お腹の赤ちゃんは順調に育っていますよ」と告げられたフォンはひと安心だ。さあ、本作のラストに見る“フォンの選択”は？

■□■上映後のQ&Aでは？■□■

上映後に開催された Q&A には、藤元明緒監督と岸建太郎撮影監督、そしてブローカー役のダーさんが壇上に並び、会場との Q&A が催された。

そこで真っ先に質問に立ったのが私の友人。何ともクソ難しい質問をしていたが、その回答はさすがにしっかりしたものだった。もう一人の私の友人も、3人に対して一人ずつ質問をしたため、回答が長引き、私が質問の手を挙げた時は時間切れで、結局私の質問はできなくなってしまった。

私が質問しようとしたのは、企画段階の邦題は『フォンの選択』だったのに、公開時にはなぜ『海辺の彼女たち』という“ボンヤリした邦題”に変更されたの？言い換えれば、『フォンの選択』の方がテーマがはっきりしていて良かったのではないか、ということだ。残念ながらその質問ができず、したがってその回答をもらうこともできなかったが、あなたはどうか考える？

2020（令和2）年11月16日記